

岡山の文学散歩

伊藤 正則

吉備路文学館

岡山生まれの芥川賞作家、吉行淳之介は、『郷里』というエッセイのなかで、

とにかく岡山県には小説家がほかの県に比べて多い。古くは近松秋江にはじまって、正宗白鳥、阿部知二、坪田譲治、木下捷平、柴田錬三郎、藤原審爾：

と書いている。岡山市南方にある吉備路文学館を訪ねると、吉行のエッセイを素直に納得する。芥川賞受賞者は、吉行のほか小川洋子がおり、直木賞では藤原審爾、柴田錬三郎、重松清がいる。

財団法人・吉備路文学館は、19

86年、地元企業の中国銀行によって設立された珍しい文学館だ。また、館名が示すように、古代の吉備を想定して資料が収集されている。このためあつて関係者は、小説ほか各分野で180人に及んでいる。

一、二階の展示場は企画展で、年4回展示替えるが、うち1回は全国レベルの企画展とのこと。この時期は「岡山の近代詩人7人展」と「吉備路の作家重書展2」を行っており、地方でなければ見られない展示を堪能した。(DATAはP34コラム参照)

ユーマアのおふれる

名随筆家、内田百閒

ひやうけん

内田百閒(1889~1971)の代表作といえば『阿房列車』シリーズ。

故郷の岡山に列車が近づく、作者の胸の鼓動が聞こえてくるような描写がある。



180人の資料を収集 吉備路文学資料館

汽車が旭川鉄橋に掛かって、轟轟と響きを立てる。

(中略) 鉄橋を渡ったら、ぢきに岡山駅である。

百閒は岡山市古京町の「志保屋」という造り酒屋の長男として生まれた。生家は戦災で焼失したが、その一角、郵便局の隣の民家の塀に、牛の鋳物が載った石碑があり、「木蓮や塀の外吹く俄風」の俳句が彫られている。丑年生まれで牛の好きだった

田譲治「子ども館」を紹介され、地域の人々と子ども達との土曜日を中心とした活動を知ることができた。

次に市立中央図書館を訪ねた。前庭に文学碑がある。御影石の上にハトに囲まれ、頬杖をついた少女のブロンズ像があり、「童心浄土」の文字が刻まれている。図書館の二階には坪田の展示コーナーもあった。坪田の「童心」は随所に生きいきとしていた。

白樺派の歌人、木下利玄
旧足守藩主の甥として生まれた木



少女のブロンズ像「童心の浄土」碑



木下利玄生家 粗壁造りの土蔵と長屋門

ある利玄の生家は格式のある造りだった。粗壁造りの土蔵と長屋門は、岡山県指定史跡である。

旧木下家の庭園であった近水園の池に浮かぶ鶴島には、

花ひらを
ひろけつかれしおとろへに
牡丹おもたう
夢をはなる、

の歌碑が立っていた。幼い日に遊んだ自然に囲まれて立つ歌碑は、ほんものの文学碑のひとつである。昭和

下利玄（1886〜1925）の生家と歌碑を訪ねた。岡山市足守は、岡山市から遠かった。吉備津神社、備中高松城跡を過ぎて、やっと旧足守藩侍屋敷に着いた。旧足守藩木下家の藩邸内にある利玄の生家は格式のある造りだった。粗壁造りの土蔵と長屋門は、岡山県指定史跡である。

旧木下家の庭園であった近水園の池に浮かぶ鶴島には、

花ひらを
ひろけつかれしおとろへに
牡丹おもたう
夢をはなる、

の歌碑が立っていた。幼い日に遊んだ自然に囲まれて立つ歌碑は、ほんものの文学碑のひとつである。昭和

備前市歴史民俗資料館

備前市歴史民俗資料館では、企画展「和気閑谷の学び舎」近現代を拓いた偉才たち」を開いていた。主な展示は、正宗白鳥、備前焼の藤原啓たちと「閑谷の学舎」であった。

一階の文芸室へ行く。ここでは、正宗白鳥（1879〜1962）の直筆の原稿、書簡、色紙、29巻の全集のほか、肖像画、生家の写真など貴重な資料が多かった。弟・正宗敦夫（1881〜1958）は、生涯を生地・穂浪で過ごし、国文学の研究に没頭、その蔵書を「正宗文庫」と名づけていたが、その一部資料、写真などが展示されていた。

三木露風（1889〜1964）は、兵庫県龍野出身で閑谷学校に学び、唱歌『赤とんぼ』で有名になった詩人である。藤原審爾（後出・奥津温泉）は、東京生まれだが、片上小学校、閑谷学校に学んだ縁から写真などの資料が展示されている。

柴田鍊三郎（1917〜1978）は、備前市鶴海の生まれ。祖母に溺愛されて

12年の建立。

私は古京町の生まれであって、古京町には後楽園がある…と、俳句「春風や川浪高く道をひたし」と、俳句「春風や川浪高く道をひたし」



古京町の百閒生家跡 牛の鋳物と句碑

た百閒にちなんだものだ。すぐ近くの相生橋の南側に「おかやま三光荘・県民プラザ」がある。一階に「百閒記念コーナー」があり、遺品や遺墨が展示されていた。

さらに、旭川沿いの左手の公園には、「内田百閒記念碑園」と石柱が立っている。入ると、低い花崗岩の割り石積みみ文学碑がある。碑には随筆『古里を思ふ』からの一節

が彫られている。15回忌（85年4月20日）に除幕式が行われた百閒第1号の文学碑だが、ひかえ目に刻まれた文字が薄く読めないのが残念だ。

百閒は第六高等学校（現・県立朝日高校）から東大に進学している。朝日高校を訪ねると、正門と石垣は当時のまま、六校記念館ともに威厳があり、さすがと感ぜられた。

瀬戸町まで足を延ばして百閒ゆかりの「金剛童子社」と、直筆の句碑「うららかなや敷の向うの草の山を訪ねた。生誕百年記念（90年）の建立で、品のいい碑である。

20歳代で岡山を離れた以降、様変わりした岡山を見て思い出がこわれることを恐れ、頑として郷里に帰らなかった百閒。だが、終生、岡山を愛し続けた彼は、少年の日を回想して望郷の思いを込めて書かれた名作が多い。信心深い祖母に連れられてお参りに行った『三谷の金剛様』もその一つである。

「子どもの心の風景を 描いた坪田譲治

日本児童文学の三大作家の一人

坪田譲治（1890〜1982）のゆかりの地を訪ねた。JR岡山駅西口から約1キロ、なかなよし保育園の周辺が、善太と三平を主人公にした坪田の代表作、『お化けの世界』『風の中の子供』『子供の四季』などの舞台となったランプ芝居場の島田製鐵所があった所である。だが、周辺は市街地化し、譲治の育ったところの田園風景の面影はない。生家も昭和62年に取り壊されて会社の所有地となってしまった。わずかに残った大木、「くすの木」の根元に「坪田譲治先生生家跡」の碑があった。

母校の石井小学校を訪ねた。校門を入ると、植え込みの中に譲治の胸像と「うさぎとかめをわすれず」と銅板に記された碑があり、向かい側にも「子供は咲く花」の碑がある。譲治直筆の書が掲げられている部屋で下山俊子校長先生から、「善太と三平の会」「坪田譲治を顕彰する会」七月七日の命日に開かれる「善太と三平の星祭り」などの話をお聞きした。また、図書室にある譲治の寄付をもとにした「坪田文庫」に案内された。さらに、石井幼稚園にある「坪

高さ2メートルほどのやや横広い大きな自然石に、二行に記されている

生ぬくきにほひみたせて
山さくらさきはまれば
雨よぶらしも

津山市のシンボル鶴山城址は、近くと大きくて立派だった。大手門に着くまでに城壁の石垣に目を奪われた。鶴山公園は、桜の木が多かった。春は桜の名所らしい。津山出身の歌人、尾上八郎（柴舟・1876-1956）の歌碑も桜の木の下にあった。

津山城址と尾上柴舟の歌碑

おのゝえいしゅう

08696714306

29日31日。大人300円。

JR 山陽本線吉永駅からタクシー10分
開門は9時〜17時。休館日は12月
29日31日。大人300円。

◆DATA：備前市関谷784。

した。藩外からも若者が集まり、多くの学者、文人を生んだ。全体が国の特別史跡で国宝の講堂をはじめ国の重要文化財が多い。藩校の遺風は岡山県青少年教育センター関谷学校として受け継がれ、青少年の教育に貢献している。



尾上柴舟の歌碑 津山城址

る。やがて雨がやってくる。春の日の満開の山桜の叙景歌である。昭和29年、文化の日に、建立されたこの歌碑、歌もいいが、場所もよく上等の文学碑だと思いがちながら城址をあとにした。

文人が愛した奥津温泉

吉井川の流れが美しい溪谷沿いにある奥津温泉は、湯も木造の宿もいい。老舗の河鹿園は、藤原番爾（1921-1984）ゆかりの宿である。彼は東京本郷の生まれだが、幼くして両親を亡くし、父の生家である岡山県和



晩夏の奥津温泉表通り

気郡片山町（現・吉備市）の祖母の家で育てられ、岡山との縁は深い。藤原の出世作は1948年に発表した『秋津温泉』。戦後文学ではまれな叙情的作品として好評を得た。藤原はこの悲恋の話を和歌山の旅館で聞いたが、備前に住む叔父に連れられて河鹿園を訪ねた時、この温泉が気に入り、ここに舞台を移して小説を書いた。温泉の名を『秋津温泉』、旅館の名を『秋津荘』とした。1962年、岡田茉莉子主演で松竹により映画化された。岡田はこの小説を読んで、自分の100本出演記念映画として企画、意欲的にとりくみ、



備前市歴史民俗資料館

育ち、腕白小僧として有名だった。慶応義塾大学在学中から『三田文学』に作品の発表をつづけ、1951年『イエスの裔』で直木賞を受賞した。1956年から週刊新潮に連載した『眠狂四郎無頼控』があたり、爆発的人気作家になる。この小説で円月殺法という剣法を創案し時代小説に新しいジャンルを開いた人である。

◆DATA 備前市東片上2806。
JR 備前片上駅から徒歩約5分。
9時〜16時30分。休館日は月曜祝日の翌日、年末年始。入館無料。
0869674428

正宗白鳥の生家跡と文学碑

自然主義文学の大家といわれた正宗白鳥の生家跡を訪ねた。穂浪は片上湾に近い港町でまさに「入江のほとり」だった。住吉神社の脇から北へ小路を入ると、左側の土塀に「正宗白鳥生家跡」と記されていた。海持ち島持ち山持ちの旧家だったが、家は取り払われていた。だが、残った広い屋敷の大きなクスノ木の下に、白鳥の文学碑が建っていた。自然石にはめこまれた黒御影石に『入江のほとり』の一節が刻まれている。

西風の風いた跡の



正宗白鳥の生家と文学碑(奥に)

入江は鏡のようで
漁船や肥舟は
眠りを促すような
櫓の音を立てた
白鳥 入江のほとりより

『入江のほとり』は、ふるさとの家を題材としたもので、大正4年、雑誌『太陽』に発表されて好評を博した小説である。

特別史跡 旧関谷学校

しずかに



国宝に指定されている関谷学校講堂

江戸初期の備前の藩主・池田光政が庶民教育の場として建てた学校で、壮大な理想郷、儒学の殿堂だった。この夢は以後の藩主に受け継がれて、元禄年間のころ、現在の施設が完成



映画「秋津温泉」の
ラストシーン・奥津溪谷

新子の心の傷を表すのにはびったりの所だった。

1933(昭和8)年夏、与謝野鉄幹と晶子が奥津温泉を訪ねている。

その時詠んだ歌が10基の歌碑となつて、吉井川沿いの「歌の小径」に点在する。河鹿園には晶子直筆の歌の掛軸が保管されていた。

温泉公園には赤磐市出身の歌人、岡野直七郎の歌碑がある。

音立ててながるる水のすがしきは
そのみなもとへついにかならず

昭和50年の建立で、いい歌碑である。

木山捷平詩碑

木山捷平(1907〜68)は笠岡市に生まれ、東京の東洋大学に学び、詩人として出発、のち小説を志す。

満州の農地開発に携わったが、戦後帰国してから文壇に地位を固め昭和37年、満州生活の経験をもとにした『大陸の細道』で芸術選奨文部大臣賞を受ける。詩碑は郷里の古城山公園の海の見える眺望のよい一角に、1945年、建てられた。

杉山をとほりて杉山の中に

一本松を見出でたり
あたりの杉に交つて

あたりの杉のやうに
まっすぐに立つてゐるその姿
その姿がどうもをかしかりけり。

旧家の庭にある歌碑は

ひんがしの島

根の中のきびつくに
きび生ふる主をたがわすれめや
である。

ほかの主要な文学碑

- ・近松秋江詞碑(和気郡和気神社)
- ・薄田泣菫詩碑(倉敷市連島厄神社)
- ・津山市井口長法寺
- ・与謝野晶子歌碑(真庭市湯原温泉)
- ・湯元 津山市美作学園高校
- ・若山牧水・喜志子・旅人歌碑
- ・(新見市哲西町二本松)
- ・佐佐木信綱歌碑(瀬戸内市生恋)
- ・柳原白蓮歌碑(備前市伊部)
- ・岡野直七郎歌碑(赤磐市山陽町)
- ・直七郎生家 岡山市県立朝日高校
- ・小川正子歌碑
- ・(瀬戸内市長島愛生園)
- ・永瀬清子歌碑(備前市)